

平成 29 年 4 月 8 日

山梨県若手研究奨励事業費 研究成果報告書

所属機関 山梨県立大学
職名・氏名 講師 大村梓

*本研究成果報告書においては、研究成果概要書にて紙幅の関係から詳述できなかった本事業の支援を受けて開催された国際シンポジウム「翻訳と文化：近代から現代にかけての文化形成過程」と、研究成果として出版された査読付き学術論文「翻訳と近代日本文化を巡る一考察：堀口大學と村岡花子を例に」について詳しく報告する。

(1) 国際シンポジウム「翻訳と文化：近代から現代にかけての文化形成過程」開催報告

1. 開催目的

翻訳と文化の関係性について、山梨県民の皆様が広く知識を深め、国内外の研究者と対話と議論を行うことを目的とする。

2. 開催概要

国際シンポジウム「翻訳と文化：近代から現代にかけての文化形成過程」は、2017年1月17日(火)に山梨県立大学飯田キャンパスにて開催された。

3. 開催準備

研究代表者である大村梓は、2015年に現役の翻訳家を招いて山梨県立大学で翻訳に関する講演会を行った経験から、翻訳に関心のある人々が多数いることは知っていた。また山梨県立大学での講義経験から、日本文学が海外でどのように受け入れられているかについてあまり知らない人々が多いことに気がついた。以上のことから、翻訳についての深い知識を有し、また海外での日本文学・日本文化の受容について講演が行える人物として、東京工業大学名誉教授リース・モートン氏が適切であると考えた。オーストラリア、

そして日本での長い教育経験から、日本人聴衆に向けて、日本語で講演を行える人物としても最適であった。モートン博士に本シンポジウムについて連絡を取ったところ、快く承諾して頂けた。

宣伝としてちらしとポスターを作成した。山梨県立文学館、山梨県立図書館、都留文科大学、山梨英和大学等々に送付し、シンポジウムの周知を図った。また朝日新聞山梨マリオんに、本シンポジウムについての記事を掲載して頂いた。また山梨県県民生活部私学・科学振興課の坂本様にも協力頂き、県庁本館にポスターを掲示し、ちらしを防災新館に置いて頂いた。

また、本学の学務課・教務室・総務課、それぞれの職員の方々には県民からの問い合わせ、当日の準備等々について協力を頂いた。

4. 開催プログラム

当日の開催プログラムは以下である。概ね時間通りにプログラムは進んだ。

第一部 研究報告

近代日本を彩った翻訳家たち：村岡花子と堀口大樹
大村梓 山梨県立大学国際政策学部 講師

第二部 講演

翻訳者と作家の修辭的舞：日本文学の翻訳が現代オーストラリア文学及び文化にどう影響したか？
リース・モートン 東京工業大学 名誉教授

質疑応答・全体討論

5. 開催当日の様様

参加者は学生と一般の方を合わせて 37 名であった。

第一部の大村の研究報告は学術的要素が強く少し一般の方々には難しかったかもしれないが、研究を通して得た知見を県民の方々に少しでも伝えることができたかと考え、説明を詳しくするなど工夫を行った。特に村岡花子の話に関しては、聴衆の関心が強いのではないかと考え説明に時間を割いた。

第二部のモートン教授の講演は、よりかみくだいて海外における日本文

学・日本文化の在り方を山梨のことにも言及しながら分かりやすく説明して頂けた。アンケートの項で詳しく述べるが、アンケート結果から参加者の満足度が高かったことは明らかである。

質疑応答・全体討論においては、県内の大学関係者からの専門的な質問から一般の方からの質問まで、様々な質問が寄せられた。そこから、翻訳と文化に関するテーマへの参加者の関心の強さがうかがえた。



(リース・モートン教授)

6. アンケート集計結果（回収数：34 [回収率 91.9%]）

今後、研究成果を広く県民に発信していくために、アンケートを実施した。回収数は34枚であり、91.9%という高い回収率であった。本アンケートの結果を今後の研究の成果発信に活かしていきたいと考える。アンケートの集計結果を以下に詳しく記載する。

1. あなたの年齢をお答え下さい。

10代：12名

20代：7名

30代：5名

40代：4名

50代：0名

60代：5名

70代：1名

80才以上：0名

2. 本講演会の内容をよく理解できましたか？

よく理解できた：6名

まあまあ理解できた：19名

どちらともいえない：4名

難しかった：4名

3. 本講演会で一番印象に残った話は何ですか？

翻訳は言葉だけでなく、その文化や歴史なども影響するという話。

国によって物から連想される言葉が異なること。

海外で日本ブームが3回もあるなんて知りませんでした。

オーストラリアの文化現象との関係について考えたのは初めてだった。

リース・モートン先生の話。

ハイブリッドへの可能性。

日本作品を翻訳すれば、それは外国文学になってしまうという矛盾の話。

翻訳という行為の捉え方についての話。

文化とは言葉の認識であるということ。

俳句の英訳について。

日本文学の翻訳によって、オーストラリア文学・文化に及ぼされた影響。同じ言葉でもくどくならないように、別の日本語訳をつけていたこと。翻訳は言語が出来ることは当然のこと、その上で文化への理解や歴史を熟知していることが重要である。

村岡花子の話。

堀口大學の話。

4. この講演会によって、翻訳に対する印象は変わりましたか？

変わった：17

変わらない：8

わからない：8

5. どのように変わったのか教えて下さい。(4で変わったと回答された方)

翻訳を作業や仕事のイメージで考えていたが、文化と密接なことが分かってイメージが変わった。

翻訳の可能性と不可能性を考えるためのヒントを少し頂きました。

翻訳と文化の関連性。

良い方に変った。

古典文学の解釈は世代によって変わるというお話を聞いて、私は翻訳の在り方は昔もこれからも変わらなくていいものだと思っていたので、驚きました。

翻訳によって文化のイメージが変わるのは面白い。

翻訳にはいろいろな能力が必要だということ。

オーストラリアで日本の詩が翻訳されていることすらあまり深く知らないで、大変面白く聞かせて頂きました。

一回だけ翻訳して終わりというわけではなく、繰り返し時代に合わせて行われているということ。

翻訳家であり、山梨で生まれ育った村岡花子に興味をさらに持ちましたので、人物史・文化史として調べてみたいです。

6. この講演会は、新しい知識を得られるものでしたか？

はい：32

いいえ：1

わからない：1

7. また翻訳や文化に関する講演会があったら参加したいですか？

はい：23

いいえ：1

わからない：10

8. ご意見、感想などございましたら、ご記入ください。

翻訳は書かれた国の文化、考え方など広く知らなければならぬし、日本語（日本文学）の知識もなければ難しいものだと改めて思いました。

自分も少しやることがあるので、面白い講演会でした。

モートン先生の素晴らしい日本語に感動しました。寒い山梨まではるばる足を運んでいただき感謝します。

モートン先生の話で、戦後についての日本人の感覚の話が印象に残りました。「日本人」について深く熟考した作家、司馬遼太郎の本を是非翻訳して欲しいと思いました。

ありがとうございました。

私の中の「前提」がまだまだ足りない、と思いました。もっと理解ができるよう、知識を深めたいと思いました。ありがとうございました。

翻訳に関して、いろいろな見方、考え方を学ぶことができました。とても興味深かったです。ありがとうございました。

翻訳についての考え方が変わった。翻訳によって文化に影響するとは。比較文学に興味を持ちましたので、勉強したいと思いました。

また次回も是非参加させてほしいです。

翻訳した人はその作品にどの程度の責任があるのか。

普段、このような講演会を聞きに行かないので、貴重な経験ができました。

山梨に関連のある村岡花子の話から、日本文学の翻訳が国外に与えた影響に展開され、広く翻訳と文化について学ぶことのできる貴重な機会となりました。

7. まとめ

アンケートの結果から、参加者にとっても新しい知識を得られる有意義なシンポジウムであったことが分かる。全体討論においても多くの質問があり、時間の関係から回答の時間が少し足りなかったのが残念であった。

(2) 査読付き学術論文「翻訳と近代日本文化を巡る一考察：堀口大學と村岡花子を例に」『山梨国際研究』概要

1. 執筆目的

本論文の執筆目的は、シンポジウムで広く県民に向けて研究の成果を公表したが、学術的な分野でも成果を公表したいと考えたからである。また日本語と英語での論文執筆を考えているが、まずは日本語での出版を目指した。その際、日本語読者がより関心を持つような内容へと、シンポジウムの経験から内容を高めることができたと考える。

2. 論文概要

本論文は以下の項に分かれている。

- (1) はじめに
- (2) 二人の翻訳家と近代日本
- (3) 翻訳という文化的行為の過程
- (4) 堀口大學と村岡花子の翻訳テキスト
- (5) おわりに
- (6) 謝辞

論文末に次の謝辞を入れさせて頂いた。「本研究は2016年度大村智人材

育成基金事業（山梨県若手研究奨励事業）の支援を頂きましたことを、ここに感謝申し上げます。」（論文自体は、この成果概要末に添付させて頂きました。）

堀口大學の翻訳に関する研究については、博士課程から行っているために蓄積があるが、村岡花子の翻訳に関する研究については、まだ知見を深めている途上である。村岡を中心とした研究論文を、今後は書いて行きたいと考える。

本論文では、二人の翻訳家の翻訳論（翻訳に関する考え方）を比較し、読者層の違い（文学者・知識人、一般の方々・子供）を考察し、それぞれの翻訳テキストを比較する手法を取った。本研究の研究概要でも述べた通りの研究方法で、本論文を執筆した。

二人の翻訳家にとっての目的や読者層の違いから、原文に忠実に訳すのか、訳さないのかという違いが生れることが明らかになった。

3. 論文準備

本論文の執筆準備としては、シンポジウムの開催によって一般の方々から貴重な意見を頂くことができた。それによって、学術的でありながらも一般の方々の関心にも答えうるような論文になったのではないかと考える。

また執筆の準備として山梨県立文学館を訪問し、資料調査を行った。そして新潟県長岡市立中央図書館堀口大學コレクションに赴き、貴重な資料の調査を行うことが出来た。その際、地元で発行されている堀口に関する雑誌を発見することが出来た。

本研究費で支援を受けたことにより、手に入りづらかった資料が手に入るなど、時間や手間の短縮をすることができ、研究が促進された。

これからの展望

これからの展望としては、やはり村岡花子を中心においた論文の執筆を行って行きたいと考える。本研究費で支援を受けたことによって、村岡花子に関連する書籍の購入や資料の複写などの資料調査を行うことが出来た。資料は十分に集ったので、これを元に村岡に関する日本語の単著を執筆中である。村岡自身の人生に関する書物は多く存在するが、彼女の翻訳を学

術的に深く考察した研究書はまだ出版されていないので、そういった本を執筆することが現在の目標である。同時に、英語での論文執筆も行っている。こちらは The Journal of The Oriental Society of Australia (オーストラリア東方学会論文誌) への投稿を目標にしている。

2015年4月に山梨県立大学に赴任してから、村岡花子の研究は行いたいと常に考えていたが、なかなか資金や時間の目処が立たずに二の足を踏んでいた。今回このように本事業の支援を受けて、国際シンポジウムを開催し学術論文を出版することが出来るなど貴重な機会を頂いた。

大村智博士、及び山梨県県民生活部私学・科学振興課、そして山梨県立大学の職員の皆様に深く感謝申し上げます。